

した取り組みを基礎に、これからの大学評価・学位授与機構による教養教育についての外部評価にも対応できるでしょう。

しかし、この間、本学の運営諮問会議での指摘を受けるまでもなく、教養原論などの大規模授業の解消に取り組みましたが、本質的解決をみていません。また、新入学生を対象とする全学共通授業科目として少人数ゼミを開講することを提案し、1年以上の論議の結果、当面は各学部ごとの対応にゆだねることになったことも、残念なことでした。これらは本学の教養教育の充実を目指して必要な試みだと思いますが、特に大規模授業の解消は早急に取り組むべき課題であることは、改めて言うまでもないことです。

これから、高等学校の学習内容の変化に伴い、学生の多様化、個性化がさらに進み、大学教育の環境が変化するなかで、これに適切に対応する教養教育が重要になります。その点で本学も、21世紀の大学が果たすべき学問研究と人材の育成及び教育研究の成果に基づく社会貢献の目標に照らして、教育システムのより一層の改善・改革が必要だと思えます。

この間、全学の共通教育の充実に西塚学長が深い理解を示され、国際・教養系図書室の充実や施設・設備の整備などに支援を惜しまれなかったことは、たいへんありがたいことであり、学生諸君にとって幸せなことでした。また、当センターの専任教員をはじめ職員の皆さんには、心強いご支援をいただきました。この場をかりて改めて感謝の意を表明いたします。本学の教育・研究の一層の発展を祈りつつ、退任の挨拶とします。

僕の学生時代：新入生へ贈る失敗談

大学教育研究センター運営委員会委員
(経営学研究科教授) 得 津 一 郎

僕は今年年男だから、神戸大学に入学したのはちょうど30年前になる。しかし、満開の桜を見ながら、大学での講義はどんなものだろうかと希望に胸を膨らませて六甲の坂を登ってきた学生ではなかった。入学したのは経営学部だったが、特に経営学とはどのようなものかを真面目に考えたこ

ともなかった。ただ、新聞記者になりたくて社会科学系の学部を選んだ。それも単に当時の自分の学力に合わせて大学や学部を選んだ。新聞記者になるためには、とにかく社会科学系の学部を卒業しておけば良いだろうと考え、どんなことを勉強したいというようなことは明確になっていなかった。大学で勉強することそのものに興味があったわけではなかった。大学入学の動機が不純だったわけだ。

大学教育研究センター（当時は、教養部と呼ばれていた）で一年半、何となく単位を揃えただけで、専門課程に進学したが、やはり講義そのものには興味がわかなかった。どうもそれが社会で役立つようには思えなかったし、それが自分の知的好奇心を満たしてくれるほど格調高いものとも思えなかった。そこで、もう一度勉強をしておし、医者にならば社会に役立つことをやろうと思った。大学をやめようと思い、ゼミの指導教官の松田和久教授に相談した。ちょうど3回生の最初だった。松田先生は、多くの点で僕の意見に賛成してくださったが、最後に「どうや、最初の動機はどうであれ、ここまで勉強してきたのだから、このまま経営学を勉強して社会の医者になればどうや。」と言われた。僕が、現在、経営学や経済学を勉強することを商売にしているのはこれがきっかけである。



その後、僕は遅ればせながら勉強を始め、母校の経営学部で経営データ解析という専門科目を教えることになった。この間、いくつかの論文を専門雑誌に発表したり、専門書を著したりもしたが、研究生活の今になって痛感しているのが、教養科目、今でいう教養原論など全学共通授業科目の重要性である。これを若いときにあまり勉強しなかったことが、今僕の研究のボトルネックになっている。

ある辞書によると「教養」とは「広い知識」と「豊

かな心」だそうだ。つまり、教養という言葉は2つの側面を持っているのである。

(広い知識) 子供は、一日一日連続的に発達するというのは本当だろうか。少なくとも見た目にはそうではない。たとえば、何の兆候もなくある日突然、言葉話し出す。しかし、言葉話し出す直前まで、子供がまったく発達していないわけではないだろう。目に見えないところで発達しているに違いない。一見「言葉話し出す」という能力とは関係のない「2本足で立ち上がる」という能力が身につくまで、遠くへ足を運び、窓の外の風景を見て、話すべき知識が十分備わり初めて「言葉話し出す」というステップに到達する。人間の発達に必要な複数の回路、つまり広い知識がそろって初めて新しいステップに到達できる。それらが揃うまでは、次のステップに到達しないから見た目には発達していないように見える。

「言葉話し出す」ということを経営学、物理学、医学などの専門分野に置き換えるならば、それらを十分に習得するステップに到達するために、他のいろいろな回路がすべてそれにふさわしい段階に到達する必要がある。だからこそ、それぞれの専門分野に進んで行く学生は、それに必要な回路として教養原論などの全学共通授業科目を十分に学ばなければならない。医学や、物理学、経営学などの専門分野を極めようとするほど、この広い知識を得ることが大切である。しかし、広い知識を揃えている段階では自分が発達しているようには実感できないからつらく、くじけそうになる。

(豊かな心) 自分の狭い見にとらわれず相手の立場にたって考えることが出来る豊かな心。つまり広い知識それぞれの本質を理解し、相手がどのような論理に従ってそのようなことを主張しているのかを、相手の立場にたって理解することが大切なのだと思う。広い知識だけでは、本当の教養とは言えず、それが豊かな心に裏打ちされなければならない。残念ながら、広い知識と豊かな心の大切さに気付くのが遅かった僕は、現在研究に行き詰まり、なかなか相手の立場にたって考えられず悩んでいる。

神戸大学は自然科学、人文科学、社会科学に関する10もの学部を擁する総合大学であり、それぞれの学部の教官が、ここで述べたような視点でそれぞれの専門の立場から、全学共通授業科目を担当している。この利点を生かして広い知識と豊かな心を求めないすべはない。以上、とりとめもな

く、僕の失敗談を書き綴ってきたが、新入生の皆さんが、4月からの新しい大学の講義に、あせらず着実に、しかし積極的に取り組み、僕の失敗を繰り返さず、これからの大学生活を実り多いものにできることを祈念している。

情報化時代に物理学を学ぶ意義

物理学教科集団

(発達科学部教授) 蛭名邦禎

入学してくる学生の論理的思考力や批判的精神の欠如を嘆く声が、大学で授業を担当する教官から年々高まっている。種々の疑問に対して自ら手を下して実際に確かめようとする実証的な精神も欠乏してきたようだ。例えば物理では、少数の基本原則から数学を用いた演繹的推論によって種々の事実を導いて行くが、そもそもそういう議論の進め方があることすら理解しない者もいる。個々の事項を答として記憶する姿勢を捨てきれない学生は多い。受験勉強が元凶だという説がある。そのせいで記憶に頼った思考法から抜け出せないという指摘である。確かに入試の改善も必要だろう(神戸大学の物理入試問題は、従来から標準的な良問と評価されていたが、特に1999年度以降さらに基本を重視し、論理的で粘り強い思考力を問うような出題の努力がなされている)。しかし、入試のせいだけでもないようだ。受験戦争が激しかった昔の学生の方が論理的思考力が高かったし、むしろ文部省のゆとり教育政策に原因があるとの指摘もある。「理科離れ」は日本に限らず世界的な現象でもある。ここでは、社会の「情報化」も重要な要因の一つであることを指摘したい。

